



# ご自宅での抗がん剤の扱い方と注意点



抗がん剤治療は、強い副作用を心配される方がとても多いと感じます。人の場合は癌の根治を目指して、強い副作用も仕方がないものと割り切って治療する一方で、動物においては生活の質(QOL)の向上を目的に治療するため、副作用が出にくい薬用量で使うことがほとんどです。しかしながら副作用がゼロというわけでもありません。抗がん剤は癌細胞のように増殖が盛んな細胞をターゲットとして作用する薬剤です。同じく増殖が盛んな骨髄や毛根、消化管粘膜などにも作用することで、様々な副作用が生じます。

また、投薬を補助するご家族が抗がん剤に曝露すると悪影響が生じる恐れがあります。特に小さいお子様や妊婦さん(あるいは妊活中の方)がいらっしゃる場合には、厳重な注意のもとで抗がん剤治療をするか、抗がん剤以外の治療を検討することもあります。

抗がん剤の取り扱い・投与後の注意点を守り、安全に治療をしていただきますようお願いします。

## 《投与時の注意点》

- ✓ 手袋を着用するなどして、直接薬剤に触れないようにしてください。
- ✓ 飛び散りにより吸引曝露や目の粘膜からの吸収も起こるため、マスク・メガネなどの着用で保護してください。

## 《抗がん剤投与後の注意点(自宅での内服や病院での注射後)》

抗がん剤投与後平均48時間、うんち、おしっこ、唾液などに微量ながら抗がん剤の成分が含まれます。これらに触れることでも曝露を生じますので、ご家族皆さままで可能な限り以下の点に注意くださいませ。

- ✓ 排泄物を処理する際には手袋を着用し、飛び散り・広がり注意して処理する。
- ✓ 顔を舐める、くしゃみを浴びるなどを避けるため、顔を近づけたり長時間の抱っこはしないようにする。
- ✓ 小さいお子様、妊婦さんと接触させない。
- ✓ 一緒に入浴したり、布団に入らない。
- ✓ 洗濯ものは別にする。
- ✓ 投与後すぐにトリミングをしない。(どうしてもトリミングに出す際は、トリマーさんにも抗がん剤治療中であることをお伝えし、手袋を着用していただくなど相談してください)

## 《起こり得る副作用》

### ◆消化器症状(多くは投与3~5日後あたり)

消化管粘膜が荒れて、嘔吐や下痢、食欲低下などが見られます。対症療法で良化することが多いです。次回の投与時は消化器症状が起こらない程度まで減薬することもあります(腫瘍の治療との兼ね合いで検討します)。

### ◆骨髄の障害(多くは投与後7~10日後あたり)

骨髄抑制といって、骨髄で作られる赤血球・白血球・血小板が少なくなり、貧血、免疫力低下、出血が止まりにくいなどの症状が見られることがあります。白血球減少そのものでは大きな問題になりませんが、細菌が体に侵入すると抵抗できず、敗血症になってしまうと危険です。敗血症のサインとして発熱が見られることがありますので、ご自宅でも体温をチェックしていただくと安心です。

骨髄抑制の確認として、投与後数日で再診にお越しいただくことが多いです。

### ◆脱毛

ごっそり抜けるような脱毛はほとんど見られません。毛の質が変わったり、ひげが抜けることがあります。

### ◆膀胱炎

血尿、頻尿などが見られることがあります。一部の抗がん剤投与時には、膀胱炎の予防として利尿剤を一緒に使用する場合がございます。トイレを我慢させないよう補助をお願いいたします。